

学生の活力で 地域活性化を 目指す

～函館ベンチャープロジェクト～

2000年4月に開学した「はこだて未来大学」は、人と情報に視点を置いたユニークな単科大学です。函館ベンチャープロジェクトは、同大学の学生が地域活性化のために学生自身が活動をしていこうと立ち上げた組織。地元の支援も受けながら奮闘する函館ベンチャープロジェクトの活動について、同プロジェクト代表で、はこだて未来大学に在学する大久保彰之氏にお話をおうかがいしました。

函館ベンチャープロジェクト設立の背景

函館ベンチャープロジェクトが結成されたきっかけは、開学から1年が経とうとしている'01年2月。現在、同プロジェクトの顧問を務める鈴木克也氏（現はこだて未来大学教授）の集中講義が開催されたことに端を発します。「起業家としての自立」をテーマに講師としてやってきた鈴木氏が「地域のためになる新しいことを何かやってみないか」と学生たちに問いかけたのです。

当時、はこだて未来大学に在籍する学生は1期生のみ。「1期生で入学する学生は、変わり者が多いのです（笑）。何か新しいことをやりたいと思って未知の地にやってきたのですが、夏を過ぎたころから普通の大学とあまり変わらないという感覚を持つ人が出てきたように思います。私も学びたかった分野を専門にする先生がいないなど、目指していた方向の勉強ができないように感じていて、何か新しいことをしたいと思っていた時でした。ちょうど1年が終わるころで、みんなこのままでいいのかという不安を持っていたときだったように思います」と千葉県出身の大久保氏はいいます。そこに鈴木氏の呼びかけがあったことで、すぐにその場で10名の学生が集まり、「函館ベンチャー企画」を立ち上げます。

鈴木氏は集中講義の際、東京のIT企業の社長を同伴しており、集まった学生のうち2名がその企業にイ



はこだて未来大学システム情報科学部複雑系科学科4年生の大久保彰之氏

ンターンシップとして受け入れてもらうことが決定。春休みを利用して、1カ月間のインターンシップを経験した2名のメンバーは、その期間内でCD-ROMを作成するノウハウを学ぶことができました。

4月になると鈴木氏がはこだて未来大学の教授に就任、鈴木氏が顧問を務めることとなり、函館ベンチャー企画は、「函館ベンチャープロジェクト」と名称を変えます。

同プロジェクトでは、発足当時に二つの活動の理念を決めました。一つは、道南地域の大学の学生として、道南地域のためになる活動をしていこうということ。そして、もう一つは新たなことに挑戦して、学生として自己成長を図っていくことです。また、民間シンクタンクやベンチャーキャピタル勤務の経験がある鈴木氏が顧問を務めることから、地域のシンクタンク機能を果たすことを目標として活動が動き始めました。

地元の支援で活動が広がる

函館ベンチャープロジェクトでは、CD-ROM製作のノウハウを学んだ学生がいたことから、まずCD-ROM製作に乗り出します。第1号は、小さなまちにコンビニ型のホームセンターを展開する地元企業の(株)ツルヤの会社紹介でした。これは、顧問を務める

鈴木氏の仲介で実現したプロジェクトでした。その後も、企業や製品の紹介、地域の特徴をテーマにした「コンプのすべて」や「高田屋嘉兵衛のすべて」といった「すべてシリーズ」も製作され、これまで10を超えるCD-ROM製作を手がけてきました。これらの製作費は、地元の企業人たちが「学生が頑張っているから」と、共同研究費として負担してくれました。さらに、最近ではCD-ROM製作の技術を応用したWeb製作にも活動の範囲が広がっています。「CD-ROMなどは、まだまだプロが作ったものに比べれば劣っている部分はあると思いますが、それを承知で学生が挑戦したいという思いを応援してくれる地元の企業があったことが、ここまで活動を続けられた大きな要因だと思います」と大久保氏。製作過程では、製作にかかわる専門的な技術だけでなく、学生が相手企業などと打ち合わせを行い、全体構成や進行管理、人員配置などのマネージメントも学生が担当します。こうした活動は、起業家を目指す学生にとっては、企業を知るケーススタディーとして、IT技術者を目指す学生には、技術向上の機会となっています。一方、企業側も学生が製作したCD-ROMという特徴があるため、有効なPR要因になっているようです。

また、地域のシンクタンク機能の面では、観光ア



函館ベンチャープロジェクトでこれまでに製作したCD-ROMの事例



函館の学生が行った大門祭の前日に開催された「大門祭イベントフォーラム」を函館ベンチャープロジェクトが企画運営。大門地区に人が集まるためにはどうしたらいいかをはこだて未来大学の学生と市民がディスカッションした

ンケート調査や道南地域のIT企業実態調査、道路に関する調査などを手がけています。これらの調査結果は、市民に還元するフォーラムを開催する機会を設けるなど、着実に実績を重ねています。

学生がかかわる意義とは

発足から3年を経過した函館ベンチャープロジェクトですが、現在は各学年に参加メンバーがおり、この春に1期生が卒業した後も活動は継続されます。これまで、参加メンバーのなかからプロジェクトごとに数名が柔軟にチームを組んで活動を続けてきましたが、ここまで成果が上げられたことは「応援してくれた地元の企業の皆さんと鈴木先生の存在があったから」と大久保氏はいいます。シンクタンクなどの民間経験を持つ鈴木氏の存在が、依頼先からの信頼にもつながり、学生が活動する場が広がったのです。また、鈴木氏は学生の役割を「若者が活動することが、まちを活性化する中心になる」と評価しています。躍動感やスピード感、多少のことにもめげない精神力など、学生の活力は計り知れないものがあります。

大久保氏もこれまでの活動を通じて、「学生だからいえること、できることがあるように思います」といいます。経営者の意見や市民の意見でなく、しがらみにとらわれず、気負わずに正直な意見をいえることが学生の特権。「企業や地域社会を深く知らないからこそ、観光事業者の調査でも、厳しいお客さんの声をストレートにいえますからね（笑）」。地域の人々が新しい視点を発見するきっかけになったり、地域に新しい風を吹き込む役割が学生にはあるようです。

この春卒業予定の大久保氏は、函館ベンチャープロジェクトの経験を生かして、函館での起業を目指

しています。函館で立ち上げる背景には、地域にいろいろなネットワークができたことと、ビジネスモデルを構築するまちとして、函館がちょうどいい規模であることを挙げています。なかでも、既存のネットワークを生かすことができ、応援してくれる人がいることは、起業家にとっては心強い点です。「まずは函館ベンチャープロジェクトでの経験を生かし、シンクタンク的な機能を持った会社を起こして、ゆくゆくは最終的に目指している高齢者ビジネス、ライフパートナー事業に乗り出すのが夢」といいます。もちろん函館ベンチャープロジェクトとのネットワークもそのまま継続していく予定です。

卒業生で地元に残る学生は少ないといいますが、今後、はこだてベンチャープロジェクトでの経験を生かした学生が卒業後も地域に根付くようであれば、地域にとって大きな財産になるはず。学生たちを支援する風土も函館の魅力ですから、今後、この動きが地域にどう波及していくのか、また、地域において学生たちがどういった役割を果たしていけるのか、まだまだ学生たちの挑戦は続きます。



メンバーの打ち合わせの様子